

教員養成課程の学生を対象とした 進路決定要因についての調査研究

A Study on the Factors Affecting Career Decision-marking
for Students of Teacher Training Course

石 塚 誠 之*¹ 大 網 祐 輝*² 帯 川 大 輝*²
ISHIZUKA Masayuki OOAMI Yuki OBIKAWA Daiki

奥 山 寧 々*¹ 河 内 愛 華*³
OKUYAMA Nene KAWACHI Aika

キーワード：教職課程，キャリア，進路決定要因，TEM図，アスピレーション特別支援教育

I. はじめに

教員の職務は、人間の心身の発達にかかわっており、その活動は、子どもたちの人格形成に大きな影響を与えるものである。しかし、近年、教員をめぐる状況は大きく変化しており、教員の資質能力が改めて問い直されている（中央教育審議会，2006）。教員をめぐる状況の変化には、様々な要因・側面があるが、概ね以下の6点に整理されている。①社会構造の急激な変化の構造，②学校や教員に対する期待の高まり，③学校教育における課題の複雑・多様化と新たな研究の進展，④教員に対する信頼の揺らぎ，⑤教員の多忙化と同僚性の希薄化，⑥退職者の増加に伴う量及び質の確保である。特に、社会の変化への対応や保護者等からの期待の高まりを背景として、教員の中には、多くの業務を抱え、日々子どもと接しその人格形成に関わっていくという使命を果たすことに専念できずに、多忙感を抱いたり、ストレスを感じる 경우가少なくない。また、教科指導や生徒指導など、教員としての本来の職務を遂行するためには、教員間の学び合いや支え合い、協働する力が重要といえるが、昨今、教員の中に学校は一つの組織体であるという認識が希薄になってきたと指摘されるように、ベテラン教員が他の教員を指導する機能が低下するなど、学びの共同体としての学校の機能が十分発揮されていないという課題が挙げられている。

松井・柴田（2008）は、社会構造の急激な変化や教員の労働問題点に焦点が当てられる一方で、現職の教員に対して、教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関連について調査を行った。そして、個人の進路決定の違いによって、教師のアイデンティティ等が異な

*1 北翔大学教育学科

*2 北翔大学大学院生涯学習学研究所

*3 北海道日高町立厚賀小学校

ることを明らかにした。教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティの関連について調査する方法として、本多・落合（2006）が制作した医療系大学進学のプロセスの分類をもとに、教師用に適切な表現に制作した職業イメージの明確さ、決定への納得、決定時期という3点の要素を入れ、「早期決定型」、「途中変更型」、「直前決定型」、「なりゆき型」、「転職型」の5類型を定義し、進路決定プロセス類型と各要因との関連を検討した。その結果、教職志望動機との関連（教師イメージ）については、類型間に有意差はなかったものの「なりゆき型」が最低点となり、なりゆき型の小学校教員は教師イメージが中学校・高等学校と比べ低いという結果が明らかになった。また、「転職型」の安定志向得点が高い結果になり、一般職よりも、公務員の資質を持つ教職が安定している位置に属する職業と評価されていることが明らかになった。個人的経験では、「早期決定型」、「直前決定型」、「転職型」が教職の志望動機に影響を与えており、学校での感動的な体験や教職をやりがいのある仕事として認識されていた。しかし、本多・落合（2006）の研究では、教職希望動機の全容を捉えきれているか疑問が残り、対象者の背景に考慮した要因を明らかにする必要性が示唆されている。

教職を目指す志望動機とは、伊藤（2005）が提唱した教師の仕事や身分についてのイメージ、教職を志望したきっかけとなった個人的経験、理想とする教師像という3つの観点に関するものである。教職志望動機の5類型として、「早期決定型」は、子どものころから教職に憧れ、他の職業のことも考えず、当初のほぼ教職に就く予定、「途中変更型」は、なりたいたって職業があったが、成績の問題や周囲の反対等があったので、迷ったり・悩んだ結果、その職業ではなく、現在の教職に就く予定、「直前決定型」は、いくつか就きたい職業があり、教師もそのうちの1つだったが、最終的には自分の意志で選択して教職に就く予定、「なりゆき型」は、どの職に就きたいか自分の希望が不明のまま、試験に合格したので教職につく予定、「転職型」は、別の職業につく予定だが、転職も考えていると分類されている。また、教職を目指す学生に関連のある要因として個人的経験が挙げられる。幼少期の学校での生活や指導方法が影響を与えていると推測されるが、教員は子どもが親以外で最も接する時間が長いので、先生という仕事が子どもにとって一番近い存在であることが影響したと考えられる。また、人に教えるのが得意という経験からも教員を目指すきっかけになることがある。いい教員に巡り合えたことにより、理想とする教師像が明確になり、自分もそのように子どもに指導できるようになりたいと憧れを持つことも多いと指摘される。

家庭環境の差では、2つの要因があると報告されている。1つは、親が教育関係者で、子どものころから親の職業を目指すパターンが考えられる。また、親が教員であることは、収入的にも安定しており、習い事や子どもの進路選択の幅が広がると予想される。2つ目は、不景気や社会構造の急激な変化の構造によって、失業、望まないパートタイム労働、非正規雇用が増加している。いわゆる貧困層である。貧困と思われる世帯は、中学時代や高校進学時にキャリア教育を真剣に考え、「安定した職に就きたい」や「親を安心させたい」・「恩師のようにになりたい」といった個人的経験を含めて親から子への貧困の連鎖を断ち切るためにも、子ども自

身が奮起し教職を目指すきっかけになることが予想される。また、教員を志望する理由として、親の教育期待（アスピレーション）の影響が示唆されているが、子どもが親の期待を感じている項目として、人間的成長、社会・経済的地位達成、良い子、結婚・家庭生活、社会貢献、健康性、身体的活動、友人関係、進学・学歴があげられている。岡田（2004）は、親の期待と子どもの関係については、親の期待と自分の願望の不一致が生じた場合や、親の期待が自分の能力に対して過剰である場合には負担になると報告している。現代は、少子化が進み、親が子どもを自分と同一化し、子どもは一身に期待を背負わなければならないという状況が見られる。学年と共に学業達成に関する期待や圧力が増加することが予測される一方、期待するプロセスや期待の認知に注目することによって、親子の関係性の中で期待の効果を適切に生かすことが可能となる。

上記を踏まえ本研究では、教職を志望する大学生を対象に、進路決定における家庭環境や親の期待（アスピレーション）の影響及びその決定プロセスについて明らかにする。

研究1 教職課程の大学生の進路決定プロセスと教職志望動機について

1. 目的

本研究では、松井・柴田（2008）を参考に教職を目指す学生の進路決定要因を明らかにする。個人的経験が進路決定の要因になっているとの先行研究を踏まえ、家庭の環境や親の期待についての関連性、教職を志望する大学生の進路のプロセス、家庭環境や親の期待の影響を主に検討する。また、教職ではなく、一般職に進路を選んだ学生の進路選択過程を分析することで、大学1・2年生の入学時の進路希望から大学3・4年生にあたり進路希望がどう変容したか検討する。また、調査報告事例が少ない特別支援学級と特別支援学校の5類型についても検討を行う。

2. 方法

（1）調査対象

教職課程がある大学で教職関係科目を履修している大学1・2年生158名にアンケートを配布し、152名から回答を得た。有効回答率は96%であった。また、教職に関係している科目を履修している大学3・4年生24名にアンケートを配布し、21名から回答を得た。有効回答率は87.5%であった。

（2）調査時期

202X年11～12月にかけて、web上で回収を求めた。

（3）調査内容

大学のオンラインの講義にインターネット上で制作したwebアンケートで実施した。回答

は携帯電話、スマートフォン、パソコンでQRコードを読み取ってもらうことでwebアンケートにアクセスする方法で行われた。いずれも回答は無記名で実施した。本調査のアンケートは、基本的属性と教師の進路決定プロセスと教職志望動機、生活実態調査、教育・就職期待の4つの質問項目群から構成した。それぞれの項目への回答は、進路決定プロセスは、5類型からの選択してもらった。教職志望動機は、「1=まったくあてはまらない」、「2=あてはまらない」、「3=あまりあてはまらない」、「4=どちらともいえない」、「5=少しあてはまる」、「6=あてはまる」、「7=非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。教育・就職期待は、「感じていた」、「感じていない」、「わからない」の3件法で回答を求めた。生活実態調査への解答は、経験が「ある」、「ない」、「ない（経済的に出来なかった）」を基準に回答を求めた。以下、質問の内容について記す。

1) 基本的属性

配布時に、教職希望の1・2年生、教職希望の3・4年生、一般職希望の1・2年生、一般職希望の3・4年生を設定した。

2) 学生の進路決定プロセス5類型

松井・柴田(2008)の教師の進路決定プロセスの類型を、教職を目指す学生用に一部修正した。分類としては、「早期決定型」、「途中変更型」、「直前決定型」、「なりゆき型」、「転職型」の5類型とした。分類名は表示せずに、「大学入学時の進路決定選択について」説明された文章から選択してもらった。5類型全ての説明にあてはまらない場合や回答者が進路未定と判断した場合に備え、「不明」を追加し、択一式で回答を求めた。現段階で教員ではないため、免許取得予定、現時点の進路希望の項目を設けた。また、進路希望を学生の最終的になりたい学校種別として回答を求めた。一般職を目指す学生に対して一部、質問事項を学校での内容から会社をさす内容へ修正した。

3) 教職志望動機

伊田(2006)の尺度構成に基づいて、教師という職業像について問う「教師イメージ」8項目と教師を目指すきっかけや理由などを問う「個人的経験」14項目の2つの観点から作成した。松井・柴田(2008)の研究では、現職の教員用に作成されていたので、本研究では学生用に質問項目の文章を未来形に一部修正した。

(i) 教師イメージ

教師イメージについては、柴田(2008)を参考に作成した。「安定志向」「自己志向」の2つの下位尺度からなり、「安定志向」は4項目、「自己志向」は3項目、計7項目で構成されている。「安定志向」では、「社会的な身分が安定している職業だと思ったから」「社会的に高く評

価されている職業だと思ったから」「給与面で待遇のよい職業だと思ったから」「誇りをもって人に言える職業と思ったから」の4項目からなる。「自己志向」は、「自分の専門的能力を役立てる職業だと思ったから」「今までの身に付けてきたことを活かせる職業だと思ったから」「自分のやりたいことができる職業だと思ったから」の3項目からなる。

(ii) 個人的経験

個人的経験は、松井・柴田(2008)を参考に、「教育への志向」「学校への愛着」「恩師への憧れ」「対人志向」で構成されている。「教育への志向」では、「人に何かを教えるのが好きだったから」「人に教える立場に魅力を感じたから」「教師に向いていると人に言われたから」の3項目からなる。「学校への愛着」では、「学校に関わる仕事がしたかった」「学校という場所に魅力を感じたから」の2項目からなる。「恩師への憧れ」では、「恩師のようになりたいと思ったから」「理想的な魅力ある教師に出会ったから」の2項目からなる。「対人志向」では、「いろいろな人と出会う機会のある仕事が好きだから」「人と接する仕事に就きたかったから」の2項目からなる。

4) 生活実態調査

生活実態調査は、江別市が実施した「江別市子どもの生活実態調査」と「江別市子どもの生活実態調査保護者用」をもとに、制作した。大学進学前までの家庭環境の様子を回答してもらった。具体的には、学習に関する部分「子ども部屋」の有無や「自分専用の学習机」の有無や娯楽「ゲーム」や「おこづかい」「インターネット」、生活に必要な日用品や食料について回顧の形式で行った。北海道という地域特性がある質問項目を一部加えた。

5) 親の期待

春日・宇都宮(2011)を参考に、「教育・就職期待」の項目を作成した。「勉強ができる子であってほしい」「いい高校・大学に行ってほしい」「いい企業に就職してほしい」「良い成績をとってほしい」「業績の良いところに就職してほしい」「将来のため、しっかり勉強してほしい」「賢くあってほしい」「何に関しても一番になってほしい」「立派な社会人になってほしい」「親の言う事をきいてほしい」「安定した職業になってほしい」の12項目を設定した。なお、「業績の良いところに就職してほしい」は、教職につく公務員は利益のある業績は発生しづらいと考えたため、本研究では除外した。

3. 分析方法

(1) 得点化について

アンケート項目の回答において、5類型は選択式、教職志望動機は、7件法で回答を求めた。「まったくあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を

3点,「どちらともいえない」を4点,「少しあてはまる」を5点,「あてはまる」を6点,「非常にあてはまる」を7点に得点化した。家庭環境については,点数化せずに結果の検討の際に使用した。分析は,クロス集計を行った上で記述統計を用いた。

4. 結果

(1) 学年と進路決定プロセスについて

大学1・2年生と3・4年生について,進路決定プロセス5類型のどこに分類されるかクロス表にまとめたところ,1・2年生は「早期決定型」が84名と最も多く,次に「直前決定型」43名であった。また,「途中変更型」は,14名となった。「なりゆき型」と「転職型」は入学した時点では少ない結果となった(表1)。

表1 学年と現時点での進路決定要因について

	早期決定型	途中変更型	直前決定型	なりゆき型	転職型	不明	合計
学年							
1・2年生	84	14	43	8	1	3	153
3・4年生	7	0	10	1	0	1	19
合計	91	14	53	9	1	4	172

(2) 大学入学時の進路希望について

大学1・2年生の進路決定要因と現時点での進路希望先のクロス表を表2に示した。大学1・2年生が入学時に最終的になりたいと答えた進路希望先である。全体で見ると,「早期決定型」が84名であり,小学校,中学校,高等学校,幼稚園,養護教諭で「早期決定型」が最も多かった。次に「直前決定型」42名であり,「途中変更型」が14名となっていた。特別支援学校の「早期決定型」は2名であり,逆に「直前決定型」のほうが5名と多くなっていた。その他は,留学や認定こども園などの回答であった。

表2 入学時の動機と現時点での進路希望について

	小学校	中学校	高等学校	特別支援学級	特別支援学校	保育園	幼稚園	公務員	養護教諭	進学	その他	合計
早期決定型	18	17	18	0	2	5	14	0	9	0	1	84
途中変更型	5	0	1	0	0	1	1	1	4	1	0	14
直前決定型	11	4	9	2	5	2	2	1	6	0	0	42
なりゆき型	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8
転職型	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3
合計	40	23	30	2	7	8	17	2	19	1	3	152

また大学3・4年生は小・中・特別支援学級・特別支援学校を進路希望とする対象の結果になるが,進路決定後の要因としては,「直前決定型」が最も多い結果であり,次いで,「早期決定型」となった。大学3・4年生の時点では,「なりゆき型」「転職型」と回答した学生は見られなかった(表3)。

表3 大学3・4年生の進路決定後の要因と進路希望

進路決定後の要因	小学校	中学校	特別支援学級	特別支援学校	合計
早期決定型	6	0	0	1	7
途中変更型	0	0	0	0	0
直前決定型	8	1	1	1	11
なりゆき型	0	0	1	0	1
転職型	0	0	0	0	0
不明	0	0	1	0	1
合計	14	1	3	2	20

大学3・4年生の就職時の進路希望について、進路決定要因と現時点での進路希望先について、小学校だけでみると「直前決定型」が8名その次に「早期決定型」が6名であった。全体的にみても、「直前決定型」が多く、教員採用試験の結果や一般職を考えているという回答が1・2年生より増えていた。また、3・4年生の進路を目指す理由について記述を分析したところ、教員イメージの「安定志向」と「自己志向」両方で高い傾向が見られた。中でも「恩師のようになりたかった」や「人と接する仕事につきたかった」の割合が高かった。

(3) 家庭環境の差を検討

大学入学までの家庭環境については、「これまで自分の家が貧困」と答えた人は「そう思う」が11名、「思わない」が112名、「わからない」が31名という結果であり、全体でみても、貧困と疑いがあると自覚していた学生は1割から2割程度であった。また、アンケート結果、親の年収について「わからない」が半数以上占めていた。100万円以下と認識している人数が非常に少なく、多くの学生が年収200～1000万円以上、親の年収があることを知っている結果となった。表4では、大学1・2年生を対象として、「これまで自分の家が貧困であるかと思った」と「学習塾に通っていた」「現在、奨学金をかりているか」の関係についてクロス表で示した。貧困だと思われる学生のうち、塾に通っていた人が10名中8名であり、経済的な理由で通えなかったと答えたのは1名であった。親の期待の中に学習期待が強く表れた結果となった。高校での「進路選択ですぐ働くことを考えたか」に対して、貧困と思われる学生の半数は、すぐに働くことを考えておらず、進学を望んでいる結果となった。「奨学金を借りているか」という質問に対しては、「借りている」と回答した人は、全体の半数を超える結果となった。借りていると答えた中でも、将来のため大学で必要だと思った・生活費で必要のため借りているとの回答が多かった。奨学金を借りないと大学に行くことが難しい（授業料など払えない）と回答した人は、上記の人数の半分程度にとどまっていた。

表4 1・2年生のこれまで貧困と感じたかと学習塾・奨学金について

		学習塾に通っていた			
		通っていた	通っていない (経済的にできない)	通っていない (必要と思わない)	合計
これまで自分の家 が貧困だと思いま したか	そう思う	8	1	1	10
	わからない	22	1	8	31
	思わない	77	1	33	111
合計		107	3	42	152

		現在、奨学金を借りていますか			
		借りていない	借りている (経済的にできない)	借りている (必要と思わない)	合計
これまで自分の家 が貧困だと思いま したか	そう思う	3	5	2	10
	わからない	10	11	10	31
	思わない	55	9	46	111
合計		68	25	58	152

また、表5では、大学3・4年生を対象として、「これまで自分の家が貧困であるかと思った」と「現在、奨学金をかりているか」のクロス表を作成した。母数が少ないため参考データではあるが、大学3・4年生で貧困と思われる層で学習塾に通っていた人はいなかった。また、奨学金のみで比べると、借りていると借りていないが半数に分かれた。「進路選択ですぐ働くことを考えたか」についても、貧困と思われる層でも少数となり少しだけ考えたという結果となった。

表5 3・4年生のこれまで貧困であるかと奨学金を借りているのかの関係

		借りていない	借りている (経済的にできない)	借りている (必要と思わない)	合計
これまで自分の 家が貧困だと思 いましたか	そう思う	3	1	3	7
	わからない	2	1	1	4
	思わない	6	1	2	9
合計		11	3	6	20

(4) 親の教育期待と進路の関係について

大学1・2年生について、「いい企業（公務員含む）に就職してほしい」と「勉強ができてほしい」の要因についてクロス表を作成したところ、「勉強ができてほしい」と感じていた学生が最も多い結果となった（表6）。また、「勉強ができてほしい」という親の気持ちと就職期待、両方を感じていた学生は全体の半数程度となった。同じく、「良い成績をとってほしい」という項目と就職期待についても同様の結果であった。一方、就職期待と「勉強ができてほしい」「良い成績をとってほしい」両方感じていないという学生が上記に次いで多いという結果であった。

表6 就職する期待と教育期待の関係

		勉強ができてほしい			
		わからない	感じていた	感じていない	合計
いい企業 (公務員含む)に 就職してほしい	わからない	8	15	4	27
	感じていた	6	46	13	65
	感じていない	1	11	47	59
	自営業を継ぐ	0	1	0	1
合計		15	73	64	152

		良い成績をとってほしい			
		わからない	感じていた	感じていない	合計
いい企業 (公務員含む)に 就職してほしい	わからない	9	15	3	27
	感じていた	5	47	13	65
	感じていない	4	14	41	59
	自営業を継ぐ	0	1	0	1
合計		18	77	57	152

また、3・4年生では、「親の就職期待」と「勉強ができてほしい」両方感じている人が最も多い結果となった。同様に、「良い成績をとってほしい」についても「勉強ができてほしい」と同じく、両方感じている人が最も多い結果となった。

5. 考察

(1) 進路決定要因と進路希望について

入学時点では、大学1・2年生は「早期決定型」が84名と最も多かったことから、大学1・2年生は、子どものころから、なりたい職業を意識していたと思われる。これは高校から大学への進路決定時に教職課程のある学部・学科のある大学を選んでいることから推測される。入学時点でしっかりとした目標があることが示されており、自分のなりたかった職業のことが勉強でき、大学生活や職業観に期待が強いと考えられる。次に「直前決定型」43名という結果が表れたが、早期決定型とは劣るが、学校現場や教師に魅力を感じており、進路選択の選択肢に教職課程のある大学に行くことを検討していたためと考えられる。一方、「途中変更型」は、全体の1割であった。理由として、学力や家庭の事情もあると言われているが、具体的には受験失敗による進路の不透明化、進路の再考でぎりぎりまで考え選択した人が多いため、直前で進路が大きく変わったと考えられる。「なりゆき型」の傾向として、教職課程のある学部・学科のある大学を選んでいることから、「なりゆき型」が少ないと考えられるが、大学の費用や、なんとなく自分の入れる学力で大学を選んだ可能性が考察される。「転職型」については、教員免許を生かした別な仕事へ繋げることを考えつつ、入学にいたった場合があると推測される。

就職時の進路希望と進路決定要因について検討したところ、大学3・4年生では、教育実習

の経験の有無が一つの要因になったと考えられる。この時点で、自分が教員の適正があるかどうか自身で判断している可能性がある。適性があると感じた学生は「早期決定型」のまま進路を進めることができ、教職に就くことをあきらめた学生は、一般職のほうに向かって進路を考えていると予想される。そのため、なんとなく教員になる学生は少なく、「なりゆき型」と「転職型」が少ない結果に繋がったことが考えられる。一般職では、教員に向かないと思った人が「なりゆき型」と回答していた。また、4年生では自分に適性があり教員採用試験の結果、合格をもらったので、教職になると判断した人が多いため「直前決定型」に人数が集まったと考えられる。

(2) 大学入学時の進路希望に関わる比較・検討について

幼稚園、小学校、中学校、高等学校は、自分の経験からイメージが付きやすいため、大学1・2年生は、自分になりたい職業に向かって進んでいることが考えられる。しかし、特別支援教育について目指したい人数が少ないのは、障害の理解が進んでいないことや、具体的な指導のイメージがわからない人が大半であり、まだ大学で特別支援教育についての知識や経験が身につけていないこと、学びが十分でないことに起因していると思われる。反対に特別支援教育を目指す学生は、学校の友人や家族や親族に対して特定のきっかけがあり、他の学生より身近に障害についての理解が進んでいるために、目指すきっかけとなっており、その決定に対する意識が強いことが推測された。

(3) 進路を目指す要因を分析について

大学1・2年生の段階では、「安定志向」に比べて「自己志向」が強いことが明らかになったが、教職課程のある学部・学科のある大学を選択した一方で、就職や安定という先のイメージにとらわれることなく、自分が学びたい職の知識が増えていき理想の教師像や指導のイメージ、子どもの対応の仕方や理解が進むことで満足することが自己を高めていたと考えられる。「これまで身に付けてきたことを活かせる職業だから」との関係性も示されており、先の未来のことではなく、学びを深めはやく教師になりたいという期待が強いため表れた結果と推測される。反対に「給与面でよい職業だから」に対して「あてはまらない」と答えた割合が多かった。お金により進路決定をしたわけではないという意識が強いこと、給与のわりにあわない仕事量や残業手当がでにくいという負の教師イメージが世間的に広がっており、学生にも労働と給与額の不一致が感じられていることが考えられる。しかし、「誇りをもって人に言える職業である」と思われている一方で、「社会的身分の安定」や、「社会的に評価されている職業」との関係性が認められなかったことから、今後、さらに検討する必要があるといえる。

大学3・4年生に関しても「給与面でよい職業だから」に対して「あてはまらない」と答えた割合が多かった。どの学年間についても、教員の労働時間と給与が良いとは言えなかったのは世間的问题もあると思われる。一方、大学3・4年生は現場に出た時のイメージの質問項

目については、プラスの意見が多かった理由として、教育実習の体験や教師像や自覚が生まれているからであると推測された。

(4) 家庭環境について

アンケートの質問項目は大学入学までの間、貧困であったかを問う質問であった。時期によって家庭の経済的な変化があったと考えられるが、貧困だと思っていた学生でも、学習塾に通っていることが大半を占めていたことから親の教育期待が高く、経済的負担が増しても、子どもの学力の向上のために学習塾（家庭教師）に行かせる家庭が多かったと推測される。現状の苦勞ではなく、子どもが学習面で先の未来で負担にならないような先行投資として考えていた可能性があるが、この学力を向上させることや良い進学先を目指すことが、親の教育期待・就職期待に繋がる可能性がある。親の視点としては、大学まで行くことを前提としていることが推測されたが、多くの学生が、進路選択ですぐ働くことを希望していないことから、高校生の時期には、家庭の経済的状況に加えて自分のやりたいことを考えて進路選択をしていたと考えられる。

奨学金の有無については、貧困と思っていた・思っていない、問わず調査対象の半分以上が借りていることから、大学に入学する費用・授業料・生活費などが家庭に大きな負担を与えていると考えられる。一人暮らしの場合、学費とは別に、家賃などの負担があるため、学生のアルバイト代だけでまかなうことは難しく、奨学金を借りながらではないと生活苦になってしまう可能性が高い。また、家庭に複数の兄弟がいる場合は、かかる教育費も加算される。自分のためだけでなく、家庭全体を見たときに借りるという選択をした学生も多いと考えられる。

(5) 親の教育期待と進路の関係について

全体的にみると、親の教育期待と就職期待は二極化されていると考えられる。1つは、親の期待が強く子どもに学習面で伝わるパターンである。これは親の教育的ニーズが非常に高いためと考えられる。親の学歴なども関係しており、家庭でも勉強や成績の話をされており、親の学習期待に子ども自身も気がついていたりと思われる。そのため、普段から、勉強や成績のコミュニケーションをとっているため、自分が進みたい道の進学の実感もあつたと考えられる。ただ一方、親の期待もわかることから、プレッシャーを感じることも出てくるだろう。2つ目は、就職・成績について親の期待を全く感じていないパターンである。こちらも学習塾に通わせており、親の教育ニーズは高いことがわかるが、子ども側からすると、最終的にある親の就職期待については、一切感じず、将来の自身の目標などを見据える中で、進路決定を行なった可能性が考えられた。

(6) 就職時の進路希望に関わる比較・検討について

大学3・4年生の最終的な進路決定について「直前決定型」が多くなった理由として、教員

採用試験の合格の有無が関係していると考えられる。4年生になると一般職についても考える人も多く、合格の有無で進路先を変更する場合が多い。「早期決定型」については、合格後悩むことなく教職につき、不合格であっても非常勤講師など現場で力を活かすことを選んだと考えられる。上記についてさらに詳細に検討するため、教職希望の大学4年生によるインタビュー調査を行う。複数経路・等至性モデル（以下TEM）を作成することで、進路決定要因及び、その背景要因について検討する。

研究2 TEMを使った教職希望の大学4年生による進路決定要因の検討

1. 目的

研究では、教職を志望する動機として、「自分に接してきた教師の影響」や「人に教えることの喜びや楽しさを経験したこと」などが挙げられたが、実際に教職を目指す学生がどのような課程で教職に就くに至ったのか、その詳細について明らかにするため、志望動機や現在の影響について考え、教員になる過程に焦点を当てた複数経路・等至性モデル（TEM）を描き出すことで、個人で経験した時間の流れを重視した分析を行う。教員になることを最終的な等至性として、その過程にある「等至点」や「分岐点」「社会的方向づけ」「社会的ガイド」をTEM図によって作成することで、その人、個人の教職希望に対する流れを可視化することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

教職課程がある大学の4年生で公立の教員採用試験を受験し、合格した学生1名

(2) 調査時期

Microsoft Teams を使いインタビュー形式で行った。所要時間は、50分ほどであった。

(3) 調査内容

研究1のアンケートを用いながら、その質問事項に関する具体的なエピソードについて深掘した。小学校から大学までの学校や家庭の様子について質問し、回想して回答することを求めた。アンケートに追加して質問したインタビュー内容は以下に記す。

1) 小学生時代

「小学校での友人間の困難」「小学校に先生について」「小学生時の性格」「小学生時代の親との関係・家庭環境について」「学校での学力の困難」「学力で親からの苦言」「教員を目指す上で小学校時代の出来事は影響について」

2) 中学時代

「中学校での教員の関係について」「中学校の先生について」「中学校での進路選択」「中学時代の家庭環境の変容」「中学校での学力の困難」「教員を目指す上で中学校時代の出来事は影響について」

3) 高校時代

「高等学校での進路選択」「高校の進路選択での親の反応」「高校時代の家庭環境」「高等学校での学力の困難」「教員を目指す上で高校時代の出来事は影響について」「親の期待についての感じ方」

3. 結果

インタビュー内容からできたTEMを図1に示した。小学生時代の友人関係では、いじめを目撃した経験があった。小学生時代には、教員になる気持ちはなかったと回答している。中学校時代にも、教員となるきっかけは現れていない。しかし、小学校時代と異なり経済的負担が増えたというエピソードがあった。中学生時代でも、教員としてのきっかけはなかったが、家庭環境の経済的負担が進路選択に大きく影響を与えていた。高校進学後は、友人に勉強を教える機会があり、その友人から「教えるのがうまい」と言われたことが職業選択でのきっかけとなっていることが明らかになった。また、この頃から親からの就職期待を感じていることがわかっていく。対象者は、研究1のアンケートで「直前決定型」と答えている。親の期待と自分に向いている職業を考えた結果、公務員という安定した職に加え、自分の素質をいかせると考え、教職のある大学を目指し現在にいたっている。

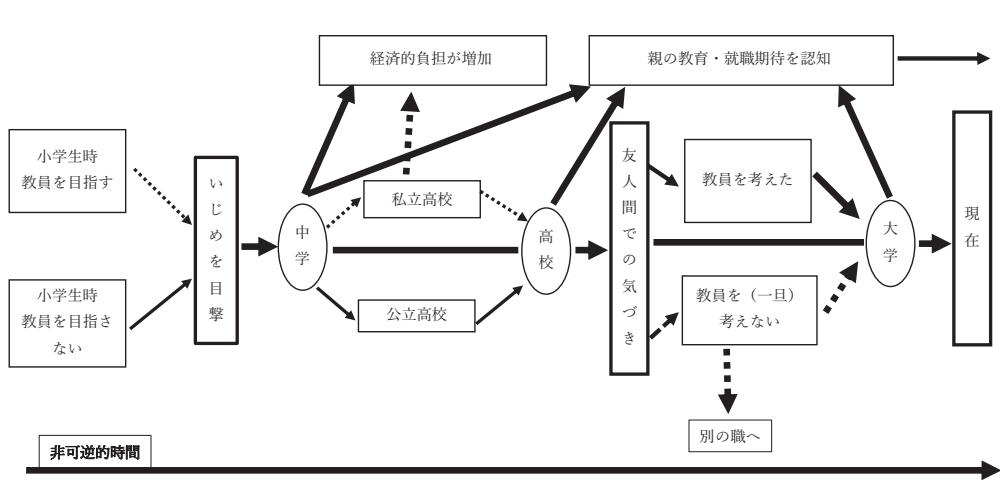


図1 教職を目指すまでのTEM

4. 考察

インタビュー内容から、いじめを未然に防げなかった教員の学級経営や、問題解決できないことに疑問に思っており幼少期の対象者の性格は、正義感が強く曲がったことが嫌いな性格であったと考えられる。回顧質問の中で、いじめの目撃があったからこそ、教員になったときにしっかりと対応をする教員になりたいと希望していた。また、中学時代の経済的負担については、中学2年生の時から塾に通い始めたことにより生活が苦しくなっていた。高校を進学する際は、経済的負担を感じており、私立高校の選択肢を考えていなかった。塾に通うことで、親の教育期待が高まっていることが明らかに感じられていたという。公立高校を選ぶ際も、自分の実力よりも上の高校を目指していたが、ランクを落として中位の学校へ進学したという。受験に失敗して、私立高校に行くことになった場合、ますます家庭の負担を考えた結果と考えられる。最終的には、自身が決定しているが、経済的な困窮等の社会的要因も進路決定に含まれている結果と考えられる。大学受験については、国公立の試験に失敗している。公立大学より私立大学のほうが金銭面の負担が大きいのは明らかであるが、現在、対象者は私立の教育課程がある大学に通っている。親からは、安定した職業や社会人になってほしいという願いや大学まで卒業してほしいという希望が強く、本人が教員になるなら私立でもしっかりとした教員養成のプログラムがしっかりしている大学を選び、奨学金を借りながら大学に通うことで教職課程のある大学に入学することになったと推測される。

Ⅲ. 総合考察

1. 教職を目指す要因について

教職を目指す要因としては、1・2年生は子どもの頃からの憧れや期待を抱いて「早期決定型」を目指して自分の夢（教職）を目指す傾向が強く表れた。しかし、3・4年生での進路決定では、「直前決定型」へと変更する可能性が半数程度現れていた。教育に関する知識が深まることに加え、学校現場の状況など実際に体験することで、考えが変化したと考えられる。また、最終的に取得する免許についても、学生自身の経験が深く重なっていると予想される。家庭環境と親の期待についても、親の教育的ニーズが高いことが推測されるが、経済的な負担があったとしても、学習塾に通わせるなど子どもの教育期待や就職期待が強い傾向が明らかとなった。親が子どもに立派な社会人になってほしいという気持ちや安定した職についてほしいという親心がうかがえる。また、親の年収なども関係していることが推測された。

2. 今後の課題

本研究は松井・柴田（2008）の研究を参考に、教職志望動機を「教員イメージ」「個人的経験」の2つの因子から構成されていると仮定して調査を行った。また、本研究では、教員志望動機のほかに生活実態調査や親の期待についてかかわる項目を利用している。本調査の目的で

ある，教職志望動機の「教員イメージ」については，現職の教員と学生では違うことが明らかになった。また，親の教育期待や就職期待が子どもに及ぼす影響についても推測されたが，本研究では，コロナウイルス影響で3・4年生の母集団が少ないなどの課題が残った。そのため，今回の調査を予備調査的な位置付け，母集団を増やすだけではなく，キャリアの決定の段階ごとに要因を調査していく，例えば，5類型の複合的な要素を考え検討する，例えば，「直前決定型」と「なりゆき型」を合わせたもの，親が教員であったため憧れた「親・尊敬型」などを増やすとして，複合的な要因についても検討することが想定される。また，貧困と思われる層が少ない理由の一つとして，大学にいくまでの過程で振り落とされている可能性もあるため，中学生・高校生の時に教員になりたいと思っても，どこで事情が変容したか等，長期的な調査を行い，今後も教職を希望する学生の進路決定要因及び，その動向について明らかにしていくことが重要といえる。

IV. 参考文献

- 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）．文部科学省．
- 江別市（2018）江別市子どもの生活実態調査アンケート調査票（編）江別市健康福祉部子育て支援室子育て支援課．
- 福田茉莉・安田裕子・サトウタツヤ（2013）変容する語りを記述するための質的研究．立命館大学人間科学研究所．
- 本多陽子・落合幸子（2006）医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み——進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討．栃木県立医療大学紀要，11，45-54．
- 伊藤勝憲（2005）就職志望動機推定尺度の試み——教師イメージ，個人的経験，理想とする教師像に注目して——．名古屋芸術大学研究紀要，26，15-25．
- 春日秀郎・宇都宮博（2011）親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響．立命館人間科学研究，22，45-55．
- 松井賢二・柴田雅子（2008）教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関係．新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，7，141-159．
- 岡田尊司（2004）パーソナリティ障害に接し，どう克服するか．PHP 研究所．
- 渡部雪子・新井邦二郎（2008）親の期待研究の動向と展望．筑波大学心理学研究，36，75-83．

